

説教要旨「こころ燃ゆる」

ルカによる福音書 24章 13～35節

イエス様が復活されたイースターの日の昼間、二人の弟子たちが、エルサレムからエマオという村に向かって歩いていました。イエス様の復活の知らせを聞いてもそれを信じることができず、それゆえに希望を打ち砕かれた絶望の中で暗い顔をして論じ合いつつエルサレムを離れ去ろうとして歩いているこの二人の弟子たちの傍らに、復活なさったイエス様が近付き、共に歩いておられます。彼らは目が遮られていて分からなかったけれども、イエス様は彼らの話を聞き、そして聖書を説き明かされたのです。しかし彼らの目はなお遮られています。なおも先へと歩み続けようとするその旅人を二人は無理に引き止め、彼ら三人は夕食の席に着きました。その席で、旅人が「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」。その時、二人の目が開け、その旅人がイエス様だと分かったのです。

しかし共に食卓についておられる方がイエス様だと分かったとたんに、その姿は目に見えなくなりました。それは、イエス様が共にいて下さることを知らされた者は、もはやその姿をこの目で見る必要はないからです。それは決して不確かな、あやふやなことではありません。むしろ私たちの目に見えないからこそ、いつでもどこでもイエス様と共に歩むことができるのです。目に見える現実には何の救いも助けも見出せないような中でも、私たちのために十字架に



かかって死んで下さり、復活して今も生きておられるイエス様が共にいて下さることを信じ、その主イエス・キリストに依り頼み、そこに希望を見出すことができるのです。

(2018・4・8 説教者：稲垣真実)